グラフ野田No.41 ■編集／野田市企画財政部秘書広報課 ■発行／野田市 〒278-8550 千葉県野田市鶴奉7番地の1 ☎04-7125-1111（代表） ■発行／平成20年 ■制作協力／株式会社第一制作室

句歌で巡る野田 13

橋本　徳壽

はしもと　とくじゅ

橋本　徳壽（1894－1989）

豆るいに奈べつゆきたるすぐに煮て
野田をあぢはふかたじけなくも

明治27（1894）年　9月10日、横浜市南太田に生まれる
大正7（1918）年　土岐善麿の校閲を経て、『船大工』を自費出版
大正14（1925）年　正岡子規直系の古泉千樫に入門
大正15（1926）年　門人達と共に『青垣会』を結成
昭和2（1927）年　『青垣』を千樫追悼号として創刊
昭和14（1939）年　大日本歌人協会より第一回作品賞を受賞
昭和50（1975）年　第二回短歌研究大賞を受賞
平成元（1989）年　94歳で永眠

農商務省水産講習所に務めていた橋本徳壽が、短歌を作り始めたのは、大正5年、23歳のときで、石川啄木（1886～1912）が義兄に贈った『一握の砂』を本箱で見つけたのが、きっかけでした。以後、練習のため1日20首から50首を作ったといいます。

大正7年には、土岐善麿（1885～1980）が選んだ短歌をまとめた『船大工』を自費出版。結婚し、長女が生まれた後の大正14年、正岡子規直系の古泉千樫（1886～1927）が書いた『川のほとり』を読んで感動し、入門しました。翌年、千樫のもと、門人たちと『青垣会』を結成。昭和2（1927）年11月に月刊『青垣』を創刊します。

同会発足当時、門人であった知久正男が実家のある野田市に帰郷したことや、昭和23（1948）年3月に『野田文化団体協議会』が設立されたことを契機に、知久は、深津釣葭（1914～1966）、戸辺守章（1909～1982）とともに、同年4月「下総歌話会」を結成しました。結成会に出席した徳壽は、当時の旭村を訪れ「麦ふとる道に捨てたる黒き穂に思ひもかなし旭村をゆく」と詠みました。

また、徳壽は「下総歌話会」で講義を行うため、たびたび野田市を訪れていましたが、昭和42（1967）、「深津釣葭遺歌集出版記念祝賀会」へ出席した際には野田の醤油工場を見学し「桶のそとにたたずみてきく諸味をかきまはす圧搾空気の音を」と詠んでいます。

講義のお礼として、会員が徳壽へ醤油を贈ると、表題の歌だけが送られて来たそうですが、短歌だけの礼状は、その後も交流が続く限り必ず届いたそうです。

89歳まで下総歌話会の新年会に出席して、会員たちと交流し、94歳で生涯を閉じるまで、『船大工』『海峡』をはじめとする歌集・歌論を十数冊、他に造船関係の著書も数多く残しています。

造船技師として全国の海岸を回り、木造船の設計を手がけていた徳壽は、造船業界でもリーダーシップをとった“異色の歌人”でした。

【取材協力】山口まつ氏、笠井けさ子氏
【参考資料】『鬼人橋本徳壽』原一雄（短歌新聞社）、歌集『日本列島』橋本徳壽（白玉書房）、『黒以後』橋本徳壽（至芸出版社）